

NEWSLETTER #96

関東地区例会報告

- p.1 2012年第3回例会 井上貴子編著『日本でロックが熱かったころ』書評.....日高良祐
p.3 2013年第1回例会 卒業論文・修士論文発表会.....日高良祐

関西地区例会報告

- p.5 2013年第1回例会 修士論文発表会.....岡田正樹

成城大学グローバル研究センター公開シンポジウム報告

- p.6 《日本のポピュラー音楽をどうとらえるか 2-ローカルからグローバルへの逆照射》.....今井晋
p.9 JASPM25回大会のお知らせ

Information

- p.11 事務局より

2012年第3回関東地区例会報告 日高良祐

2012年12月22日(土)14:00-17:45

於:武蔵大学 江古田キャンパス 1号館1203教室

井上貴子編著『日本でロックが熱かったころ』書評会

今井晋(東京大学大学院)「メディアの影響と表象:

日本のパンク受容の再検討(仮)」

高橋聡太(東京芸術大学大学院)「日本でロックが熱く語られていたころ」

難波弘之(ミュージシャン/東京音楽大学)「ロックとアカデミズムの間には、深く暗い谷があるの?」

井上貴子(大東文化大学)「刺激的な異文化から平凡な日常へ」

司会:南田勝也(武蔵大学)

日本ポピュラー音楽学会第24回大会が開催された2週間後の12月22日、同じく武蔵大学を会場として、井上貴子氏編著『日本でロックが熱かったころ』(青弓社2009)の書評会が行われた。周知の通り、本書評会が企画された背景には、学会誌14号、15号上と2年間に渡って交わされた「熱い」論争の存在がある。2011年に発行された14号で『日本でロックが熱かったころ』の書評が今井晋氏によってなされ、翌2012年の15号ではそこでの指摘に応じる形で、編著者の

井上氏、難波弘之氏による「書評リプライ」が投稿されたのである。議論の詳細は実際の投稿を読んでもらうとして、そこで争われたポイントは以下のように指摘することができるだろう。すなわち、ロックの「熱さ」を定める要素をめぐった認識の違いであり、「世代間のギャップ」という言葉で言い表されたものである。本書評会には、当事者である今井氏、井上氏、難波氏に加え、若手世代側として高橋聡太氏が参加し、誌面上での論争のさらなる発展が図られた。はじめに司会の南田勝也氏から書評会が開かれるに至った経緯が簡単に説明され、セッションが開始した。

まず今井氏の発表では、井上氏との立場の違いが整理された。それは「現場の声」を重視する井上氏と、「メディアによる伝播や表象」を重視する今井氏という、歴史的事実の捉え方における違いである。ポピュラー文化研究では実践者の行為よりも受け手や媒介作用の分析に大きなポイントがあるとするキース・ニーガスの指摘に触れ、今井氏はメディアを介して伝播した事実に重きを置いた歴史記述の必要性を主張する。しかし、書評リプライで井上氏が述べたような、サバルタン・スタディーズの態度（主観性の認識や、声なき者の声を聞くこと）は評価されるべきものであり、この立場の違いは対立するというよりも研究を補完し合うものであるという。

こうした見解を表明した上で、メディアに表象された日本でのパンク受容について、1970年代後半の書籍、新聞、音楽雑誌を対象に今井氏は歴史的な分析を行った。欧米でパンク・ムーブメントに火がついた初期には冷淡な態度を取った日本のマスメディアだが、レコード・リリースや来日アーティスト数が増えるに従って、マスメディア上でのパンク表象は急激に増加していく。東京ロッカーズに代表される日本のパンク・ムーブメントはそうしたマスメディア表象によって強く駆動されており、ムーブメントの当事者自身もその仕組みに敏感だったことが見て取れるのである。このようにマスメディアでの表象がパンク受容に与えた影響は大きく、歴史認識を構築するにあたって看過することはできないと今井氏は主張した。

続く高橋氏は、「熱かったころ」を経験しなかった者によるロック史の可能性について論じた。まず彼は、

本書のタイトルが暗黙の前提としてしまう、「熱くなくなった」時代という設定に疑義を呈する。井上氏らはロックが「熱くなくなった」理由として「身体性の欠如」を指摘しているが、その根拠とされている現象（デバイス・メディアの変遷、黒人性の減少、ヴィジュアル系での身体感覚の欠落等）を高橋氏はひとつひとつ取り上げ、そのいずれもが厳密に検証されることなく述べられている点を指摘。ロックが「熱くなくなっていく」過程の記述が不十分であると主張した。その上で、ロック受容における認識の変化そのものを説明するためのマクロな枠組みが必要だとし、〈シンボル／システム論〉に言及した。これは、吉見俊哉が日本のアメリカナイゼーションの変容を説明するために用い、岡田宏介が洋楽受容の分析に援用した概念である。文化の変容とは、当初は専門的メディアが媒介する「シンボル」の構築によって駆動されるが、次第にそれは不可視化し、「システム」として内面化されるという。ロックの「シンボリック」な意味は「システム」として現代のJ-POPに内面化されており、その過程でのメディアによる言説の構築こそが分析されるべきだと高橋氏は主張した。最後に、高橋氏自身による私的なロック経験を交えながら、「読む・書く・話す」といった言説形成への参加が日本のロック受容を構築してきたのであり、その過程を描き出すような歴史記述が求められていると主張した。

ここまでの若手世代による発表を受け、次に、難波氏によるロック受容の歴史認識が示された。自身がミュージシャンでありアカデミックな視点とは立場が異なるとしながら、氏の子供時代の音楽的な経験を皮切りにして個人史が語られていった。音楽家の両親の影響で小さい頃からピアノを習い続けるという、周囲の友人と比較すると特殊な環境で育った難波氏の子供時代は、SF小説の同人活動に没頭したものであったという。一方、テレビを介してGSブームに触れたことから洋楽にも興味を持つようになり、中学、高校とバンド活動を通してロックにのめり込んでいった。その時期にスカウトされ、音楽活動を本格化させていったが、周囲のミュージシャンも含めて、当時は「ロック史に載るような有名人になる野心があったわけではない」という。決してロックに対して「冷めてい

た」というわけではないが、難波氏にとって最もロックが「熱かった」時代とは、洋楽ロックに憧れていた中学生、高校生の時期であったという。

難波氏にとっては、SF 小説に没頭したのも、ロックに夢中になってミュージシャンになったのも、カウンターカルチャーが表象する不安や危険といったものへの関心が原動力であった。氏が書評リプライで「ガキの要素」と表現したロックの魅力は、こうして個人史的に振り返ることで、別のキーワードから明らかになっていった。最後に、若い世代が持つ感覚に対する自分の違和感は、同時に、新たな音楽が作り出されていくことへの期待感でもであると表明された。

最後の井上氏は、『日本でロックが熱かったころ』の出版には議論を焚きつけるという挑発的な意図があったため、その意味で非常に意義があったと最初に述べた。本書では民族音楽学を背景にして、異文化の音楽が受容されていく過程に焦点を当てた記述をしており、特に音楽的要素の変容を示すことにページを割いているという。発表では、実際の音源が年代を追って数多く再生され、日本でのロック受容の過程でシャッフルビートがどう扱われてきたのかという点の説明がなされた。欧米のロックに顕著にみられたシャッフルのノリは、バックビートに強勢を置くという特徴を示しながら、さまざまなロックのサブジャンルやリズムパターンを生み出してきた。だが日本のロックでは、その初期から裏拍ではなく表拍に強勢が置かれ、その傾向は年代が下っても変わらずに裏拍のノリはほとんどみられない。日本のロックバンドは現代まで洋楽を参照してきたと思われるが、シャッフルビートに関して見ていくと、そのノリは捨象されたといえるのである。

異文化受容の際には、何が受け入れられ、何が削られるのかという取捨選択が行われる。日本のロック受容では、黒人的なグルーブは削られ、叫びやスタイルといった他の要素が取り入れられたのである。井上氏によれば、異文化の音楽が持つ特定の身体性を、受容の過程で身につけようとして頑張る所作こそが、「熱さ」を生み出すという。現在のロック受容では、日本のロックばかりが聴かれ、異文化としての洋楽にまで遡ることがほとんどなく、これこそがロックが「熱く

なくなった」ことであると主張した。

この後は、司会の南田氏、来場者を交えてのトークセッションに移った。発表者からは自らのロック受容に関する個人的経験がさらに語られ、それらを踏まえた上で発表内容に関する質疑応答、コメントの応酬が大変盛んになされた。時間の制約上、トークが盛り上がる途中で終了せざるをえなかったが、ロックについての議論を惹起するという、本書とその書評の意図は十分に達成されたといえるだろう。

(日高良祐：東京芸術大学大学院音楽文化学専攻芸術環境創造領域)

2013 年第 1 回関東地区例会

日高良祐

2013 年 3 月 23 日(土)14:00-17:00

於：武蔵大学 江古田キャンパス教授研究棟 01-B 室
卒業論文・修士論文発表会

1. 「イングランドの第二次フォークリバイバルにおけるロイドの貢献」

廣瀬絵美(日本女子大学大学院文学部英文学専攻 博士課程前期 2 年)

本年度第 1 回目の関東地区例会では、昨年度に提出された卒業論文と修士論文の発表が行われた。最初に発表者と来場者全員による簡単な自己紹介から始まり、終始ざつぱらんな雰囲気活発に議論が行われた例会であった。

廣瀬氏の発表は、1950 年代～1960 年代にかけてイングランドで隆盛した第二次フォークリバイバル運動の中で主導的な人物として活躍したアルバート・ランカスター・ロイドの果たした役割を分析するものである。ロイドは熱心な共産主義者であり、フォークリバイバル運動に政治性を付与するという明確な意図があった。彼はレコードやラジオといったメディアを積極的に活用して運動を盛り上げる一方、社会学的・歴史学的な分析を出版していった。広瀬氏は、ロイドの出版した書籍、そして彼が編纂したレコードの楽曲

を対象に分析を行った。ロイドによる研究では、フォークソングはマルクス主義的な視点から「労働者階級の文化的実践」として捉えられており、それらを過去の遺産と見る一般的な視点は批判され、現代と過去とを結びつける動的な実践として描かれている。レコードに録音された楽曲も同様に、歌詞や使用される楽器がロイドの美意識に沿って積極的に変更され、楽曲の持つパフォーマンス性・現代性が重視されている。こうした意図的な編集は、フォークソングのAuthenticityをめぐる批判や議論を巻き起こしたが、ロイドによるオルタナティブなフォークソング像の提示によって力を得た若いミュージシャンが中心になったことで、フォークリバイバル運動は隆盛したと広瀬氏は指摘した。

イングランドでのフォークソングに限定した研究という専門性の高い発表であったことから、質疑応答ではまず用語や社会的な文脈について説明を求める質問がいくつかなされた。さらにアメリカでのフォークリバイバル運動との比較、特に労働者像の違いについて質問された。広瀬氏はこれに対してイギリスでは階級差がはっきりしていることを指摘し、ロイドの場合は広く民衆文化として扱っていると応じた。フロアとの議論は、フォークリバイバル運動の中で、移民による音楽はどのように認識されていたのかという問題に展開し、ロイドにとっての「英国性」がどの範囲まで認識されていたのが質問された。この問題は広瀬氏の今後の研究テーマでもあり、イングランド以外のイギリス地域の音楽や、移民との関係についての認識の重要性が確認された。質疑終了後、間にロイド編集によるフォークソングが数曲流された。

2. 「フリーミュージック/フリーコンテンツ ― インターネットレーベルと初音ミク現象に見るコンテンツ制作者の未来」

永野ひかり(武蔵野美術大学造形学部)

永野氏の発表は新たな文化現象として注目されているインターネットレーベルと初音ミク現象を対象に、現状の問題点の分析とそれらを持続させるための理念を提示するものである。タイトルに含まれている

「フリー」とはローレンス・レッシングによるフリーカルチャーの概念を援用したもので、2つの音楽文化が「これから目指すべき地平」を示す語として用いているという。まず、インターネットレーベルと初音ミク現象について、彼女自身がそれぞれのリスナーとして関わってきた経験から、豊富な事例を用いた説明がなされた。コミュニケーションや創作活動の連鎖として特徴づけられるこれら両文化の問題点とは、「内輪」の盛り上がり終始し、ムーブメントとして閉塞しているように感じられることであるという。永野氏はそれを解決するために以下2つの理念を提示した。1つめは、近接する文化現象と意識的にリンクし続けることにより、現状のシステムを走らせ続ける努力をすること。2つめは、インターネットレーベルと初音ミク現象が重なる部分に現れている固有の価値―彼女によるとそれは歌声と音楽が並列して扱われる「声と音のキメラ」という傾向にあるという―を提示していくこと、である。永野氏は、あくまでムーブメントに関わってきたリスナーという立場にこだわっており、本論文の結果をムーブメントに対して還元するため、全文をインターネット上で公開している。

新しく評価の定まっていない文化現象を扱った発表であり、「内輪」や「フリー」といった用語の捉え方についても同様であることから、フロアからは様々な立場によるコメントや議論が数多く提出された。またフロアに共通した認識として、永野氏が自分独自の危機感を大切にしながら議論を提示したことが高く評価されていた。質疑応答としては、「内輪」化し流動性を失うことは当事者にとってそもそも問題なのかという疑問や、「フリー」という言葉が含んでいる「ただ働き」などの否定的な側面について事例を求めるコメントなどが提出され、活発に議論がなされた。永野氏の研究テーマは、報告者のものと重なる部分が多くあり非常に刺激を受けるものであった。また、研究結果を積極的に還元していこうとし、実際にムーブメントの中で発信していく姿勢には大変勉強させられる思いであった。

本例会は、最初の全員による自己紹介が効果的だったのか、例会全体を通して非常に発言をしやすい雰囲気は保たれていた。そのことが活発な議論につながっ

たのであろう。両発表者の研究内容もとても刺激的であり、今後の研究例会への参加が楽しみになるような経験であった。

(日高良祐：東京芸術大学大学院音楽文化学専攻芸術環境創造領域)

2013 年第 1 回関西地区例会

岡田正樹

日時：2月11日(祝)13時30分～17時30分

会場：関西学院大学 大阪梅田キャンパス

修士論文発表会

1. 「クラシック音楽のコンサートにおけるマナーの意義—聴衆(オーディエンス)の姿勢から探る—」

堤万里子(京都精華大学大学院人文学研究科修士課程)

2013 年度第 1 回関西地区例会では、2 名の発表者による修士論文報告が行われた。

堤氏の発表はクラシック音楽のコンサートでのマナーの特質と、マナーに対する聴衆の姿勢を分析するものである。渡辺裕が『聴衆の誕生』(1989)で描いたように、19 世紀以来、コンサート会場では「集中的聴取」を行なう「近代的聴衆」の存在が想定され、それに合わせた禁欲的マナーの遵守が求められてきた。堤氏はこうした研究を踏まえた上で、集中的聴取を実現するための禁欲的マナーを人々がどう受け止めているのかを示すことを試みる。それは音楽コンサート全体の需要が増加傾向にある中で、クラシック部門の公演数・動員数が増加に至らない原因の 1 つが「抑圧的なマナー内容」にあるのではないか、という仮説を検証するためである。

堤氏はクラシックのコンサート会場に訪れた聴衆を対象にアンケートを行い、結果を基にマナーに対する意識を分析している。調査は京都市内の複数の会場において 3 回行われている。質問は、例えば「咳やくしゃみはハンカチ等をあてがう」というマナーを知っ

ているか/守っているか/必要だと思うか、というきっかけでコンサートに来るか、といったものである。結果からは、概ね聴衆はマナーを認識した上で、肯定的に捉えていることがわかったという。今後はクラシックに馴染みのない人々、コンサートに訪れない人々の声を集め、研究を発展させていくとした。

質疑応答では、今回のアンケート調査には有料コンサートも含まれていたが、実施は困難ではなかったかという質問が出た。堤氏は会場の許可はすぐ降りたが、主催者側の許可をとるのが難しかったと説明した。主催者側と繋がりのある人物を通して許可をもらうなどの工夫をしたようである。アンケート自体は、複数の調査員を会場の周辺に配置し、開演前や終演後の時間を使って直接配布・記入してもらう形で実施したという。他には、他ジャンルのコンサートではどうなるのか、といった比較が無いとクラシック・コンサートにおけるマナーやそれへの姿勢の特質が浮かび上がらないという指摘があった。また、クラシック・コンサートが伸び悩んでいるとすれば、それは何よりも聴衆の高齢化が問題であり、マナーの厳しさがそこまで関わっているのだろうか、という疑問が出された。後者について堤氏は、自身の調査を基に、聴衆は必ずしも高齢化しておらず、しかもそれは大学主催の演奏会でなくとも同様の傾向にあると述べた。

会場からも指摘があったように、この種の実地調査は他に類を見ないものであり、より明確な問題設定の元で調査を重ねていくことで、貴重な研究となっていくであろうことを感じさせた。

2. 「私事化するロック——現代日本における若者の音楽受容」

島村讓(関西大学大学院社会学研究科マス・コミュニケーション学専攻修士課程)

島村氏の発表は現代日本の若者がロックをどう受容しているのかを分析するものである。とりわけ、そこに〈ロック=反抗〉のイメージ(島村氏によればそれは現代日本においても残存している)がいかに関わっているのかに焦点が当てられている。まず、南田勝也(2001)のロックの「三指標」概念を援用し、日本

のロックの反抗とは何かが論じられる。日本のロックの反抗は〈アート〉指標によるものが多く、〈アウトサイド〉指標があまり有効に機能しない。「学歴」という差異による〈反抗〉も意気消沈し、90年代以降、日本のロックのアイデンティティ欠如は白日の下にさらされた。こうまとめた上で、島村氏は、95年以降のロックが扱うテーマの内面化に注目し、そこに新たな差異・〈反抗〉の基盤が見出されるのではないかと論じる。

宮台真司らの〈相互浸透〉概念（宮台、石原、大塚2007）に着目し、ロックにすらその音楽コミュニケーションが入り込んできたと島村氏は述べる。また、古市憲寿（2011）を参照し、現代の若者にとっては経済的問題よりも承認の問題・人間関係の問題の方が切実なものであるとする（例えば「リア充/非リア充」）。島村氏は、このような、個人的・内面的問題が現代日本における〈反抗〉の基盤になっているのではないかという。

以上の仮説を、島村氏はロックファンへのインタビューを通して検証する。ここでは、とあるインディーズのロック・バンドのライブに訪れた女性ファン6名を対象としたインタビューの結果が用いられる。島村氏は結果を基に、現代日本における2種類の聴き方を提示する。1つは、人間関係という差異における弱者であることに起因し、音楽受容において〈相互浸透〉などの精神的要素を重視する「観念的聴取」（ここに現代の〈ロック=反抗〉イメージが残存している様を見ることが出来る）。もう1つは日常生活のストレス発散などのために音楽を使用する「機能的聴取」である。前者は内面的問題に関わり、後者は生活リズムの調整などを重視する。承認の問題の有無という違いはあるが、双方ともロックの私事化を示しているという。質疑応答では、音楽の趣味が周囲と共有できないことを嘆いているインフォーマントもあり、それは私事化からはみ出しているのではないか、わたしとあなたの1対1の問題を何よりも重視するようなセカイ系的想像力は90年代後半のものであって、現在はコミュニティを重視する傾向に変化してきているのではないかといった指摘があった。このように、問題設定とインタビュー結果にズレが見られるのは確かで、予め用

意された答えに、やや強引に落とし込んでいるような印象はあった。しかし、比較的大きなヴィジョンのもとで現代日本におけるロック聴取のあり方を捉える試みは興味深く、提示された2つの聴取形態もロック以外の様々な音楽聴取を考える際にも有用な、射程の長い概念であると感じた。

（岡田正樹：大阪市立大学大学院文学研究科）

成城大学グローバル研究センター 公開シンポジウム大会報告 今井晋

日時:2013年1月26日

於:成城大学

《日本のポピュラー音楽をどうとらえるか 2-
ローカルからグローバルへの逆照射》

本シンポジウムは成城大学グローバル研究センターによるもので、2012年に行われた第1回に引き続いて行われた。開始に先立ち、センター長の上杉富之氏から本センターの設立趣旨と取り組みが、東谷護氏

から今回のテーマの趣旨が説明された。東谷氏によれば、ポピュラー音楽研究はグローバルなヒット曲を対象にしてきたが、実際には各地域にローカルな音楽実践が存在する。前回のシンポジウムでは、そのような音楽に対して歴史的な視点から迫る内容であったのに対して、今回はより現代的な事例を取り上げ、日本のローカルアイデンティティからポピュラー音楽のあり方に迫るのが狙いであると説明された。

1. 基調講演 せめぎ合うグローバル/ナショナル/ ローカル：YOSAKOI〜大正期民謡運動に見る重層モ ラルコンフリクト

遠藤薫（学習院大学）

遠藤氏の講演は自身の「重層モラルコンフリクト・モデル」をベースとしたものである。このモデルは「連続的に継起し続ける多様な小集団（モラル）」が相互

作用を起こしながら変容するといった見方である。それら小集団を「グローバル/ナショナル/ローカル」という三層に分け、社会や体制の変動期に起こる各集団のアイデンティティの再構築から、その変容を説明する。この社会変動の一般モデルから日本の「うた」や「おどり」といった現象を考察するという野心的な講演であった。

具体的には現代における「新民謡運動」とみなすことができる「YOSAKOI」を扱う。遠藤氏によれば、YOSAKOIの源流には盆踊りがある。盆踊りは仏教伝来や江戸期の交通網の整備、近代化の過程の新作、戦後の都市復興など様々な形で変化してきた。さらに近代国家の成立の過程で出現した「民謡」の歴史もYOSAKOIと連続しているという。グローバルとローカルの結節点として生まれた民謡は戦後には商業音楽と結びつき「民謡ブーム」が起こる。その過程で登場したのが徳島の阿波踊りに対抗した1954年の高知よさこい祭りであった。

そして、1992年に北海道大学の学生だった長谷川岳が始めたYOSAKOIソーランもそのような流れをくむ地方のイベントであった。だが、長谷川は当初からグローバルを意識して海外から人を招き、大学を中心とする若者文化としてこのイベントを発展させていった。このような盆踊りや民謡、YOSAKOIなどの「日本的」文化が地方と結びついた若者文化を形成した理由を、遠藤氏は90年代に起こった時代変化から読み解く。つまり、90年代はバブルが崩壊してグローバル化が進み、阪神大震災やオウム事件によって日本人のアイデンティティが揺るがされ、新たなアイデンティティの構築が求められ、そこで登場したのがYOSAKOIに代表される文化であったというわけだ。

これらの若者文化は、「逸脱から回帰」という秩序回復の儀礼とみなせる反面、80年代のヤンキー文化との親和性も高い。また2000年代には「新和装」といったストリートカルチャーも生まれるなど、90年代に新たに構築された日本のアイデンティティは現在でも存続している。さらに遠藤氏は、2013年のオバマ大統領の就任パレードで現れた地域性と近代的な規律訓練の融合にYOSAKOIと同様の文化的混交を見る。そして近代国家と共に生まれた「民謡」という

ローカルなアイデンティティが全世界的に「YOSAKOI」のような文化的混交によって取って変わりつつあると、講演をまとめた。

2. 発表 日本復帰前の沖縄におけるジャズ音楽家の活動

久万田晋（沖縄県立芸術大学）

久万田氏の発表は沖縄JAZZ協会の記念誌の制作過程でのフィールド調査に基づくものである。戦後、52年に主権を回復した日本とは異なり、沖縄では占領下の音楽文化が長い間続いたという。沖縄の戦後初期のバンドは軽音楽一般としての「ジャズ」を演奏していたが、49年頃からようやくスウィング・ジャズが導入された。また彼らは日本から「技術導入」としてジャズ・プレイヤーを招いたり、江利チエミなどの流行歌手の慰問のバックバンドを務めたりした。

当時は高校教師が高校生を指導してバンドを率いるほど、米軍クラブでの音楽への需要は大きく、楽器が下手でも人数揃えることが重要であったという。さらに米軍クラブには「ダンスガール」と呼ばれる女子学生の従業員も存在し、チークタイムなどに米軍のダンス相手を務めていた。そして57年には、こうした音楽家の地位向上のために「沖縄音楽家協会」が結成された。当時の設立書によれば、音楽家たちの基地内での労働環境は悪く、沖縄人音楽家の地位はアメリカ人、フィリピン人、日本人の下にあったそうだ。

このような活動から沖縄復帰後にも活躍するフィリピン人のアラン・カヒーベ、マル・ウォルドロンなどと共演した与世山澄子などが誕生している。だが久万田氏は沖縄のジャズの特徴を、モードやフリーといった新しい潮流の影響が見受けられず、エンターテインメント性が高いスウィング・ジャズが大勢を占めたことにあると説明する。また、録音機材も少なかったため、演奏のレコーディングもあまり残っておらず、創作的な契機もあまり見られなかった。

72年の日本復帰後、音楽家たちはジャズから他のジャンルの音楽に移り、ミュージシャンとして新民謡や放送音楽に関わることになる。一方、フィリピン人の優秀なミュージシャンは他の国の米軍基地に移動

していったそうだ。久万田氏の発表はまだ調査中のものだが、貴重な写真資料などが多く、非常に興味深いものであった。

3. ポピュラー音楽の消費と地域文化の形成：茨城県中央部における「ロックンロール」から 大山昌彦（東京工科大学）

大山氏の発表では 50 年代に生まれたアメリカのロックンロールが茨城県の地域文化となっていく過程が、継続的なフィールド調査に基づいて論じられた。この文化が登場したきっかけは 1960 年代末の『アメリカン・グラフィティ』などに代表される世界的な 50 年代のノスタルジア・ブームである。70 年代には日本でもキャロルといったロックンロール・リバイバルのバンド、50 年代ファッションをアレンジしたブランドなどが登場した。そしてこれらの文化は高卒の若者などに支持された。

当時の若者は 50 年代アメリカ若者文化への同一化をはかり、ロックンロールに合わせて 50's のファッションを身につけ歩行者天国で踊るという独自のサブカルチャーを生み出した。実際にはバイカー・ファッションやディスコ期のファッションなど、様々な文化をブリコラージュしたものであった。また歩行者天国がある都市とは異なり、地方では地域の祭でダンスをするような実践が行われた。

この地方への伝播において、80 年代にはロックンロールが「ヤンキー化」していくことになる。具体的には暴走族集団の活動に取り込まれる形で、ファッションが「特攻服」などに変化、ダンスもだらしなく踊るスタイルに変容し、不良集団の中で閉鎖性を帯びていった。

だが 90 年代頃から「ロックンロールの脱ヤンキー化」が起こる。本来的には途中で「引退」する 10 代限定の活動であったが、継続を望む大人たちが「ロックンロール」を「大人の趣味」として位置づけ直したのである。彼らは仕事や家庭を持ちつつ、余暇の活動としてロックンロールを実践することになる。彼らのスタイルも東京のバイカー影響を受けた「黒系」と 50's ファッションの流れを組む「赤系」といった多

様化していくことになる。

この「大人のロックンロール」では、「大人である」というアイデンティティによってメンバー同士の信頼関係が構築され、地域のネットワークを形成された。また新たな参与者として女性や小学生なども登場してきた。2000 年代には、ネットや SNS によって「ローラー」という呼称によって地域を超える広がりを持つに至る。またローラーたちには、50 年代のアメリカ文化ではなく、国産の「旧車」や昭和的な意匠といった日本の昭和 50 年代の文化への愛好が見られるという。以上をまとめ、大山氏は現在の茨城のロックンロールが地元社会に承認された固有の文化として成立してきたと説明した。

4. 同人音楽の〈場所〉性：即売会・ネット空間・ライブ会場 井手口彰典（鹿児島国際大学）

井手口氏は近年盛り上がりを見せる「同人音楽」についてローカリティの観点から分析した。同人音楽とはコミックマーケットに代表される同人誌即売会を中心に発展してきた音楽文化と便宜的に説明できる。即売会を中心とする「同人文化」は、オタク文化と同一視されるが、この 2 つは厳密には異なっている。戦前から存在する同人文化は、文芸誌や俳諧を中心とした高尚なものだが、戦後にはより大衆的な SF や漫画を中心としたものが生まれ、その中からコミケットのような大規模な同人誌即売会が誕生する。

コミケットは「オールジャンルイベント」と呼ばれ、漫画でも文芸でもジャンルを問わないものであるため、音楽も頒布販売される。他方、「音系オンリーイベント」である M3 というイベントは、「音を扱うもの」なら音楽でもボイスドラマでも発表できる。それ以外にも同人音楽を扱うイベントは、大規模なものは国内に十程度存在するという。

これら即売会に根ざした同人音楽の特徴として、井手口氏は三点の指摘をした。それはアニメ絵のジャケットに見られるようなオタク文化との親和性、ゲームソフトやプログラミングといった DTM との親和性、さらに「嫌儲（けんちょ/けんもう）」と呼ばれるスラン

グで示されるような態度である。嫌儲とは商業主義を嫌うような姿勢であり、具体的には赤字を辞さない価格設定、強引な客引きをしないという営業態度、二次創作の元ネタへの「愛」を強調することなどに見られるという。

このような即売会中心の同人音楽は、2005年以降、インターネットという新たな「場所」によって変容してきた。同人音楽の実践者たちはYouTubeやニコニコ動画などの動画サイトでプロモーションを行い、SNSでコミュニケーションを行なうようになった。さらにニコニコ動画の「歌ってみた」などで人気を集めた歌手が即売会でも活動を始めるようになる。このようなネットから即売会という流れには、従来の実践者の中からは反発の声もあるが、この二つの場所は融合しつつあるという。

また、近年の同人音楽には「ライブ会場」という新たな場所が加わりつつある。2000年代半ばから、ボカールものが増えてきた結果、歌手に人気が集まるようになり、ライブが頻繁に行われるようになった。これらの実践はアマチュアによる既存のライブ音楽との違いは見出しにくい、オタク的特徴を持つものが多い。またこれまで交流がなかった文化的越境も生じている。コンサートホールで行われる同人音楽のオーケストラの演奏でも、同人音楽のファンと共にクラシック音楽のファンも参加している。

以上のように即売会、インターネット、ライブ会場という3つの場所で展開してきた同人音楽の特徴を分析した後、今後は国外での展開について検討したいと述べて、井手口氏は発表を終えた。

5. 総合討論

討論者：佐藤良明（東京大学）、鈴木慎一郎（関西学院大学）

司会：東谷護（成城大学）

総合討論ではまず佐藤氏がグローバルと呼ばれるものは、帝国主義や植民地主義で発達してきたアメリカの「ポピュラー」という価値観に基づくものではないかと指摘した。沖縄のジャズ実践もロックンロールもアメリカの影響下であるが、そのようなグローバル

な価値観がローカルな実践の中で崩れていく過程が今回の発表の中で浮かび上がったのではないかと説明した。

鈴木氏は「ローカル／ナショナル／グローバル」といった三層構造の図式自体に疑問を呈した。実際にはそのような三層構造はうまく成立しておらず、その観点からすれば、YOSAKOIやヤンキーといった文化はそれに属さない人から見れば「痛い」ものでしかなく、ローカルなアイデンティティの表出としては成功していないのではないかと主張した。

それらの疑問に対して発表者は各自が調査する人々のアイデンティティについてコメントしたが、時間の都合上、十分な討論は行われなかった。質疑応答なども十分に行われなかったが、非常にバラエティに富んだシンポジウムであった。

（報告 今井晋：東京大学人文社会系研究科基礎文化研究専攻（美学）博士課程）

JASPM25 回大会のお知らせ

【ご挨拶】 大会実行委員長・鈴木慎一郎

2013年のJASPM大会は、12月7日（土）と8日（日）に、関西学院大学の西宮上ヶ原キャンパスにて開催されます。いわゆる阪神間の地域に立地するこのキャンパスへは、大阪梅田と神戸三宮からほぼ同じくらいの時間で来ることができます。宝塚大劇場や甲子園球場などの歴史のある娯楽施設も数キロの圏内にあります。阪神間モダニズムという言葉があるように、近代なるものについて考えさせてくれる絶好の環境のひとつと言えそうです。JASPM大会も25回というひとつの節目を迎えようとしています。会場で多くの皆さんとお会いできますことを待ち望んでおります。

【発表募集】 研究活動担当理事・南田勝也

本年度の大会での個人発表とワークショップの募集をいたします。

申し込みを希望される方は JASPM のホームページ <http://www.jaspm.jp/?p=577> より発表申込書(ワードファイル)をダウンロードし、必要事項を記載して、下記アドレスまでメール添付で送信してください。

- ・申込書には「**個人発表用**」と「**ワークショップ用**」の別があります。
- ・郵送等による申込を希望される方は、下記の問い合わせ先までご連絡ください。

受付締切：**2013年7月31日(水)必着。**

受付締切の後に研究活動委員会が申込内容を吟味したうえで、発表についてのお知らせを個別に連絡いたします。

なお8月2日(金)を過ぎても研究活動委員会より受領の連絡がない場合は、問い合わせ先にご連絡ください。

◎送付先・問い合わせ先

研究活動委員会 南田勝也
連絡先 minamida@cc.musashi.ac.jp
tel/fax 03-5984-4346

◎発表時間

例年通りです。

- ・個人発表：30分(発表20分+質疑10分)
- ・ワークショップ：3時間

◎個人発表の内容を学会ニュースレターに掲載することについて

従来の大会では、それぞれの個人発表の内容について、聴講していた会員のどなたかに、大会終了後に学会ニュースレター掲載用の報告文を提出していただいております。今大会ではこれを改め、発表者ご本人に、大会終了後にニュースレター掲載用の1200字程度の要旨を提出していただくことにいたします(2013年6月16日開催の理事会での決定)。個人発表の申し込みをなさる方は、この点をご承知おください。

◎ワークショップ企画案について

ワークショップでは、一つのテーマについて、多角的に提起される問題について、フロアとパネルの間で時間をかけて議論することができます。ご自分の研究フィールドの意義を知らしめる絶好の場ですので、奮ってお申し込みください。

パネルには通常、発表者(問題提起者=3名ほど)が並びます。非会員の方も問題提起者になることができますが、謝礼や交通費は支払われません。

なおワークショップでは発表者以外に、発表後の討議を進める「討論者」一名を置きます。討論者の選択については、後日、研究活動委員会より相談させていただきます。

◆information◆

理事会・委員会活動報告

【理事会】

2013年第1回理事会(持ち回りで開催)

2月28日議案送付

3月8日回答締切

議題1 前回議事録案の確認

議題2 新入会員の承認

議題3 2012年第4回理事会での7条退会候補者への照会結果と退会の承認について

議題4 退会者の承認

議題5 会計事務所所在地の確認

2013年第2回理事会

6月16日 於 大阪市立大学

議題1 前回理事会議事録案の承認

議題2 新入会員の承認

議題3 退会者の承認

議題4 各委員会報告

議題5 JASPM ウェブサイトのセキュリティーに関して

議題6 大会報告執筆者の選定方法と管理について

議題7 国際委員会の規約について

議題8 2013年度大会の進捗状況および2014年度大会

の候補地について

議題 9 『ポピュラー音楽研究』論文投稿規程の変更

議題 10 「編集委員会内規」の変更

議題 11 功労者会員枠の創設に関する意見交換

議題 12 学会賞の創設に関する意見交換

議題 13 その他

事務局より

1. 学会誌バックナンバー無料配布について

現在、JASPM 学会誌『ポピュラー音楽研究』Vol. 1～Vol. 11 のバックナンバーは、そのすべての記事が、科学技術振興機構のオンラインサービス、J-STAGE におきまして無料で公開されております。

(<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jaspmms1997/-char/ja/>)

そのため、事務局に所在する Vol. 11 までの冊子体のバックナンバーを、希望者の方に無料で配布しております（ただし送料はご負担いただきます）。

在庫については学会ウェブサイトの「刊行物」のコーナーに随時記載しておりますので、配布を希望される方（非学会員の方でも結構です）は事務局にお問い合わせください。また、ネット上で内容が全文公開されていない Vol. 12 以降のバックナンバーについては、引き続き通常の販売を行い、無料配布の対象とはいたしません。ご注意ください。

2. 原稿募集

JASPM ニュースレターは、会員からの自発的な寄稿を中心に構成しています。何らかのかたちで JASPM の活動やポピュラー音楽研究にかかわるものであれば歓迎します。字数の厳密な規定はありませんが、紙面の制約から 1000 字から 3000 字程度が望ましいです。ただし、原稿料はありません。

また、自著論文・著書など、会員の皆さんのアウトプットについてもお知らせ下さい。紙面で随時告知します。こちらはポピュラー音楽研究に限定しません。

いずれも編集担当の判断で適当に削ることがありますのであらかじめご承知おきください。

ニュースレターは 86 号（2010 年 11 月発行）より学会ウェブサイト掲載の PDF で年 3 回（2 月、5 月、11 月）の刊行、紙面で年 1 回（8 月）の刊行となっております。住所変更等、会員の動静に関する情報は、紙面で発行される号にのみ掲載され、インターネット上で公開されることはありません。PDF で発行されたニュースレターは JASPM ウェブサイトのニュースレターのページに掲載されています。

(URL : <http://www.jaspm.jp/newsletter.html>)

本年より、8 月の紙媒体での発行号については、会員の動静に関する個人情報を削除したものを、他の号と同様に PDF により掲載する予定です。

次号（97 号）は 2013 年 8 月発行予定です。原稿締切は 2013 年 7 月 20 日とします。また次々号（98 号）は 2013 年 11 月発行予定です。原稿締切は 2013 年 10 月 20 日とします。

2011 年より、ニュースレター編集は事務局から広報担当理事の所轄へと移行しております。投稿原稿の送り先は JASPM 広報ニュースレター担当 (nl@jaspm.jp) ですので、お間違えなきようご注意ください。ニュースレター編集に関する連絡も上記にお願いいたします。

3. 住所・所属の変更届と退会について

住所や所属、およびメールアドレスに変更があった場合、また退会届は、できるだけ早く学会事務局 (jimu@jaspm.jp) まで郵便または E メールでお知らせください。

現在、各種送付物などはヤマト運輸の「メール便」サービスを利用してお送りしております。このため、郵政公社に転送通知を出されていても、事務局にお届けがなければ住所不明扱いとなります。ご連絡がない場合、学会誌や郵便物がお手元に届かないなどのご迷惑をおかけするおそれがございます。

例会などのお知らせは E メールにて行なっております。メールアドレスの変更についても、速やかなご連絡を事務局までお願いいたします。

JASPM NEWSLETTER 第 96 号

(vol. 25 no.2)

2013 年 6 月 30 日発行

発行：日本ポピュラー音楽学会 (JASPM)

会長 細川周平

理事 栗谷佳司・大和田俊之・久野陽一・
鈴木慎一郎・谷口文和・増田聡・南
田勝也・毛利嘉孝・輪島裕介

学会事務局：

〒558-8585 大阪市住吉区杉本 3-3-138

大阪市立大学大学院文学研究科 増田聡研究室

jimu@jaspm.jp (事務一般)

nl@jaspm.jp (ニューズレター関係)

<http://www.jaspm.jp>

振替：

00160-3-412057 日本ポピュラー音楽学会

編集：平石貴士